郭上海書畫全集

第二卷

郭上海子全集

第二卷

岩波書店

野上彌生子全集 第二巻　第三回配本（全二十三巻）

一九八〇年八月七日　発行

定価三〇〇〇円

著者　野上彌生子

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上彌生子 1980

目　次

京之助の居睡……三
指　輪……二七
手　紙……五九
婦代の讃美……六五
御返事……七一
新しき命……七五
ねえ、赤さま……九五
染井より㈠……九九
五つになる児……一〇五
染井より㈡……一二七

ある女の手紙……二三五
手紙を書く日……一四九
死……一七七
父の死……二〇七
噂……二四七
洗礼の日……二六九
故郷より……二八九
K男爵夫人の遺書……二九九
姉　妹……三一九
家……三五三
小　指……三八三
後　記……四〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

小説二

京之助の居睡

京之助が自分の声の変りかけて来た事に心づいたのは漸くこの程の事であつた。半月ほど前あたりから謡のお稽古が妙に苦しくなつたのを感じてはゐたものゝ、それが声変りの来る前兆とも知らず何心なくすごしてゐるうちに、いつとなく咽喉の底にまくかなんかでも張られたような濁ツた不透明な声の響き出した時には、非常に驚いた。それと共に何だか心配な気恥しい不思議な動揺を絶えず感じ始めた。高等科の三年をすましたばかりの彼にも声帯の変化と云ふ言葉のみは聞き覚えに知つてゐたのであつたが、それが如何なるものと云ふわけの分る筈はないので、却つて物珍らしい興味と不安な心持を呼び起して、内弟子部屋の窓の下に小さい手鏡を持ち出して、熱心に口をゆがめたり舌を圧えつけたりしながら、咽喉の中を窺いて見ようとした。

身体の発達は近頃になつて目につくほどであつた。頭の上から手足まで男性らしい力が見えて来た。すべての部分〳〵に健康らしい肉がついて人形のように柔らかくふくらんでゐた頸筋から頬にかけての輪劃も、強い線に変つて来た。首はまツ直に堅く肥つた。たゞ二皮目の大きな黒瞳のみは、相変らず愛嬌よく美しく輝いてゐたが、一体の顔だちがきつく引き締まると共に、その黒瞳にも一意地ある

らしい張りをもつて来た。装束でもつけて舞台に立つと、古い弟子筋の人々の中にも、け押されぬ位ゐ堂々と見えた。

「まあどうでしよう京之助の大きくなりました事。」

「全く早いものですわねえ、もうあの子も幾つでしようね。」

「六位ゐではありませんか知ら、慥か喜多××とおなひ年だと存じてゐますよ。」

「丁度声変りで又一苦労いたしますねえ。」

と、定連と云ふような見所の一部分の人々が、こんな話を謡本の蔭で声低く話しながら彼の舞台姿を見送る頃には、京之助は全く苦しい圧迫の中にゐた。あの、自由自在に凜んゝするほど迸ばしり出てゐたあの声が忽然と涸れつぶれた事を考ふると、魔法にでもかけられたような気がするのであつた。これまでの京之助は量も柄も調子も申分のない立派な声の所有者だつたので、謡のお稽古には他の人ほどの苦労は知らなかつた位であつたから、型の時に苦しんできびしいお師匠様からなぐりつけられて涙を流す時でも、国元の面倒な叔父の家に小さくなつてかゝつてゐる一人の母親を懐しむ時でも、又は四年前、中学校に這入る代りに此能楽のワキ師の家元に連れて来られた。叔父に対しての根強い不平を思ひ出す時でも、肺臓にありたけの息をふり絞つて、何かしら一番思ふさま謡ひつくす間には、いつとなく晴れ晴れとなつて、何もかも打ち忘れた気軽い快活な少年の心になるのであつたが、この頃の難渋な発声にはそれさえも一種の苦痛に変つた。その上

「京之助」

と奥から呼び立てられて

「はい。」

と潔く答えて立つ一言の返事すら、これまでの澄み透つた涼しい調子と違つて野太い荒い声に変つたのが、恥しくもあり不快でもあつた。なる事なら一言も声も出し度くない。ぢつと唇をかみしめて黙つてゐ度いほどに考へられるのに、師匠の所置は京之助の願ひとは全く反対に出て来た。型の方を打ち捨てるほどにまで謡の稽古が激しくなつた。それも強吟のもの〳〵と撰んで責め立てるので、俄かに異なつた我と我声をもて扱ひかねて、思ひよらず調子を外したりすると、厳然と向ひ合つた師匠の口からは鋭い冷罵が容赦なく飛んだ。舞袴の膝に構えた扇子の一角がぴしりと彼の血の上つた頬を掠める事すら珍らしくなかつた。京之助は謡のお稽古でこんな目に合ふ事はたんとなかつたので、一層悲しく、情けなくなつた。

一頃のお稽古は船弁慶であつたが、ワキの詞のうち、別して荒事と云ふ伝のつく

其上一とせ、渡辺福島をおん討ありし時――――

と云ふあたりからの調子が如何しても一段張れなかつた。幾何張ろうとしてもゝう声が涸れて、苦痛の感覚さへなくなつた咽喉の底からは、たゞ火のような荒い息が出るばかりであつた。それでも師匠は猶

「張ツて、うんと張つて。」

と云ふより外の言葉は発しなかつた。京之助は二月下旬の氷りつくような板の間に、毎日うす暗いうちから袴の膝を正して大粒な涙を呑み込み〳〵謡ひつゞけたが、或日は殊にきびしくやられた。

「血を吐くまでは嘘ぢや。」

と冷然と云ひきられた時には、部屋に帰るとそのまゝ畳にうつ伏して声をあげて泣いた。丁度稽古に来てゐた兄弟子の一人が、声変りの頃の苦しさは誰も一度づゝは味はつた事だ、暫時の間だから我慢しなくちやと親切らしく慰めてくれたけれども、京之助はそれに耳を貸す余裕もないほどに涙の中に全身を投げ出して泣いた。

三月四月と世は春になつて行つた。師匠の住宅は市街からは小一里もある、昔のさる落ちぶれた名家の寮の跡とかなので、広い庭園や、木立、畑、傾斜面になつた岡と云ふようなものに取りまかれた邸の周囲には、さま〳〵な自然の推移が残りなく見られた。雪や霜の下にちゞかんで焦げてゐた土は、いつとなく艶のある柔らかな肌になつて、その下からは青いものが一時に芽を吹き出した。芝生、畑、岡の路、悉くがうす青く瑞々とよみ返つて来た。花の咲く木には花が咲いた。匂ひのある草は匂ひを拡げた。太陽は瑠璃色の空とうす白い雲の間とを出で入りしながら、注意深い企てをもつて、黄金色の光と程よい熱とを万遍なく降らして歩りくと、その度に地上の春は美しい種々な変化を進めた。崖つゞきの裏庭にある古木の八重桜が、その枝にうす紅色の花をたわ〳〵にむらがらせる頃には、毎年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

各流の能舞台はどこも春の番組で賑はふ時節であつた。その桜に面した十五畳敷ばかりの広い板の間が此家元の稽古舞台であつたが、右手の古びた壁の片隅に黒く塗つた長方形の板が一枚かけてある。それは毎月の各舞台の催能とそれに附き合ふ脇の割当とを書き留めて置く板であつた、時分柄で。

熊野、桜川、千手、雲林院

と云ふような美しい派手な能柄の名が絶えず書かれてあつた。各月の一定した催能の外に何会の催しとか、某団体の企てとかで毎日のように能は続いてゐたのである。京之助は僧脇のツレになつたり、大臣で出たりして師匠と共に方々の舞台を廻つたが、声は矢張り少しも立たなかつた。一生懸命になればなるほど、変に疳ずつた声になるので、同吟の時などは調子をこわすと云つて一緒に謡ふ人々から不興な顔をされるのも、辛らかつた。役によつては師匠からも、

「今日のコレ〳〵の箇所は京之助は謡はぬのだ。」

と差し留められる事もあつた。そんな時右も左もの人々が、腹の中を突き抜けて来たような気持のいゝ声をあげてゐる間に交つて、唖のように黙つたまゝ舞台に連なつてゐる自分を考えると妙な心持ちになつた。

「なんだつてこんな事をしてなきやならないんだろう?」

京之助はこんな事まで思ふようになつた。脇座についてシテの働きや舞をぢつと待つてゐる間が馬鹿〳〵しく長く感じられ出した。優長な舞の一手々々がぢれつ度つて〳〵たまらぬように見える事も

あつた。以前はこれどこではない。シテは彼の尊敬と羨望の的なのであつた。折にふれては

「いつそ能役者にさせられるんならシテ方をさして貰へばよかつた。分らずやの叔父さんだから駄目だなア、脇師なんて全く縁の下の力持ちだもの、詰らない。」

と不平に思ひながら、シテの華麗な装束や、主人公たる花々しい種々の動作を、脇座から子供らしい羨望の目を輝やかして熱心に見つめてゐたのであつたが、今ではどつちだつておんなじだと云ふ気がして、何につけてもこれまでの興味や熱心が皆なくなつた。

そんな心持ちの続いてゐるうちに花も散る頃になつた。此時節になると師匠は毎年京都の或舞台に招かれて、その次手に上方の二三ケ所の舞台を廻つて来るのが例で、去年、一昨年は京之助もその旅に連れて出られたのだけれども、今年は取り残される事になつた。同行の弟子たちはその出し物の申合せや支度に急がしかつた。金箔の重い狩衣や差貫や、「飛竜青海波」と云ふような由緒のある貴重な装束などが取り出されて、丁寧に旅の荷物に作られた。京之助はその中をいろ〳〵な忙しい雑用に追ひ使はれながら、去年一昨年の物珍らしかつた旅が頻りに思ひ出された。上方の美しい山や川の景色、古い都町の夜の赤い燈――――。

「ね、祇園の豆板を頼みますよ。」

と京之助は仲のいゝ兄弟子の一人にねだり顔をした。

師匠の一行は出発した。京之助一人になつた内弟子部屋は急にひろ〳〵となつた。師匠が留守の間は来客も少ないので、取次ぎに出たり茶道具を運んだりするような雑用もすつかり省かれて、朝一度庭掃除と玄関の雑巾掛けをすませば一日暇な身体になつた。たま〳〵奥の使ひで本郷あたりまで買物にやられる事もあつたが、それは却つて京之助の楽しみの一つであつた。彼は賑やかな市街の大通りをぶら〳〵しながら、路傍の人だかりに立ちどまつたり、美麗な飾り窓を窺いたり、書物屋の店に這入つて雑誌の口絵をめくつて見たりした。彼は冒険世界の愛読者であつた。それ故なけなしの小使からもきつと毎月この雑誌一冊は買つて来て、巨腕鉄公とか氷雪無人の黄金境とか云ふ読みものに少年らしい血を湧かした。けれどもふだんは稽古が忙しいのと師匠がきびしいので、昼間など大びらに読んでるわけには行かなかつたのだけれども、今は全く自由であつた。京之助は戸棚の隅に押し込んであつた古いのまで持ち出して来て内弟子部屋一杯に散らしながら夢中で読み耽つてゐると、古城の騎士や、鉄塔の勇者や、漂流船の勇敢な水夫や、その他のいろ〳〵な物語の主人公がみんな自分になつてしまつた。その瞬間には兄弟子たちの上方の旅などもう羨やましいものではなかつた。勇気が勃々として何か豪い破天荒の事がやつて見度い。何かやつて見度い、と云ふ気が頻りにして、乱雑な愛読書のまん中に大の字になつて、自由な手足を蹈み延ばしながらいろんな空想を追つてゐると、こんな時高山の絶頂にでも上つて、何かしら天に突き抜けるほど謡ひぬいたらさぞ愉快だらうと思はれた。そんな事を思ふと又声の潰ぶれてるのが一層いま〳〵しくなつたが、それでもこんな事を思つたり考

へたりせられるだけでも、師匠のいつも渋くよせた白髪の額を見ないだけでも、耳痛い冷罵をきかなくてすむだけでも、非常に愉快で自由で嬉しかつた。

或朝の事、いつもの通り拭き掃除をすました京之助が、口笛を吹きながら低い生垣の前に立つて町はづれの寂びれた往来を眺めてゐるところに、やかましい物音が聞えて幾台も荷車を連ねた引き越しが来た。畑地を間にした遠くの岡の中腹に暮あたりから手広い住宅が作られてゐたのは附近のものゝ誰も知つてゐる事であつた。而してそれが何某中将の新築の家だと云ふ事も分つてゐたので、京之助はいよ〳〵今日引き越すのだなど思ひながら眺めてゐると、その数台の荷車は京之助の家から五六軒先の横町に折れて、百姓屋や植木屋の多い、やつと轍のかゝる位ゐな狭い路を窮屈らしくのろ〳〵と通るのであつた。あたりの女子供もみな門口に立つてその跡を見送りながら、数多い荷物を羨やんだり感心したりしてゐたが、一番京之助の目を引きつけたのは、その荷車が皆横町に隠れてしまつた頃、その跡を追ふようにして、別当の乗つた一頭の逞ましい黒馬が駈けて来るかと見るまに、又一人の別当が白馬に乗りうつて通つた事であつた。

「あれに中将が乗るんだなア。」

と思つて、その二頭の馬に名高い中将の雄姿を想像しながら京之助は一種の英雄崇拝の感に打たれた。

その夕方なんとなくその方へ足が向いて新らしい中将邸の岡の方を散歩して見ると、思ひがけもなく岡の裾をめぐる小さい流の中に今朝見た白馬を一頭立たせてそれに乗つてゐた方の別当がそれを洗

つてゐるところに出あつた。京之助は珍らしい観物を見つけたつもりで岸の木蔭に立つてぢつとそれを見てゐた。馬は別当のするなりに大きな身体を任せておとなしくしてゐた。その切れの上つた葡萄色の深い獣の目には、人間のとても持ちえないようなおつとりした優しさと純潔があつた。高く嘶いて首をふる時、たて髪が薄の穂のように白く戦いだ。其処に、向ふの火薬所に通ずる畑中の一筋の広い道路を軽いほこりをあげながら、黒馬が此方を目がけてかけて来た。而して白馬を洗つてる前まで駈けつけると馬上の別当はひらりと飛び下りて、白馬の別当と二言三言何か云ひながらぬら〳〵した丸太の段々から馬を水中に引き込みながら、京之助の方をじろ〳〵と見た。目の鋭い若い別当であつた。いつの間にか岸の上には畑から帰り途の百姓や子供等が京之助と共に見物人になつてゐたのであつたが、夕暮れの陰影は空から岡の森から、岸辺に集まつた一団のものゝ上からだん〳〵に濃くなつて来た。流れはうす紫にたそがれかけた。その中に一頭の白馬のみがいよ〳〵浮き出て白く見えた。

その明けの朝、京之助は昨日のあの馬に乗つた中将を見度いと思つて、その時刻と思ふ頃を門口に注意したが想像したような馬上の姿は決して通らなかつた。此の路より外を通る筈はないのだからと思ひながら行くともなく岡の方へ行つて見ると、二人の別当が又のんきらしく二頭の馬を乗り廻して運動さしてゐた。而して黒馬の方の若い別当は京之助の顔を見ると白い歯を見せて馬上にふり返りながら、白馬と轡を並べて火薬所の路を駈けて行つた。熟れかけた麦畑や青い野菜畑の遠く続いた向うに、赤い煉瓦塀の長く続いてゐるのが火薬所であつた。京之助はどちらの馬が速いだろうと競馬を見

るような気持ちで、二頭の馬を見送つて立つてゐたが、何となしに黒の方が勝てばいゝと思つた。而して先刻の好意のあるらしい若い別当の笑顔を思ひ浮べて見て、ふと、

「あの人がもしかあの馬に乗せてくれないかしら？」

と考へつくと、非常に楽しみな事が足の下に湧き上つたように感じられた。それにしても中将は何故あの馬には乗らないんだろうと不審に思つたりしてるうちに、馬は又五月の朝の明るく晴れ渡つた空の下を、赤い煉瓦塀と玉子色の麦畑と青い野菜畑と、そんな配色の背景（バック）の中から、一目散に駈け戻つた。それから又流れの中に連れ込まれて洗はれた。

二三日、京之助は朝も夕方もこうして馬ばかりを見に出て来た。けれども以前程近よらずに少し遠くから、眺めてゐると云ふ風になつた。それは余り度重なるのと、黒馬の別当が時々白い歯を見せて微笑するのが、心を見抜かれてるようで極まりが悪かつたからであつたが、或日の朝いつもの通り川下の木の蔭をぶら〳〵してゐると、突然

「おうーい。」

と後から声をかけるものがあつた。何心なくふり返ると例の黒馬の別当が、丁度馬を引つ張つて来て川岸に立つてゐるところで、京之助の顔がそちらを向くと、も一度

「おうーい。」

と呼んで右手をあげてさし招いた。京之助は不意なので一寸と驚いて当惑したけれども、その時急に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.